



「マイクロポップ」を超える物語

昨年水戸美術館において開催された松井みどり氏の企画展によって、「マイクロポップ」という言葉が日本の美術界を席卷した。ここ10年の日本の現代美術の潮流を総括したこの定義は、当展の出品作家のみならず限りなく多くの作家を巻き込んだものであった。この言葉を耳にしてから、右も左もマイクロポップだらけだと認識してしまうのは私だけではないであろう。ただし、あらゆるところで指摘されているが、「マイクロポップ」は美術論ではなくあくまでも文化論なのである。私自身も同世代だが、1970年代以降生まれのどの青年にも、若かりしころに起きたバブル崩壊の体験が根深く心に刻まれていると言って過言ではない。これまで絶対的な権威のあった大人たちが、この事象によって富と理論、そして自信を失い、あたかも戦禍の中で逃げまどうような姿を私たちは眼にしてきた。こうしてこれまで信頼されてきたものがことごとく打ち壊された現実の中で、社会への冷めた視線の傍らで小さな物語に自らの存在価値を捜し求めていったのがこの世代の特徴と言われている。このことに該当者としての私も異論はない。

美術史に今まさに組み込まれようとしている「マイクロポップ」。これに続く新たなスタイルを見出していかななくてはならない時代にもかかわらず、いまだにマイクロポップは隆盛を極めている。当展でご紹介するはまぐちさくらこも、作品の表層においてはマイクロポップに組み込まれる作家であろう。子供の落書きを思わせるドローイング調の作風に、個人の私的な世界から湧き出すように生まれた非現実的な物語。ローテクかつプライベートといったマイクロポップ的な要素を感じさせるが、本質はそうではない。彼女の作品には、彼女の超感覚性から生まれた描写と物語の技術力が卓越している。この彼女の技術には私的な感覚だけでは成立し得ない、美術史と文学史をそれぞれ作品に結びつける要素が明確に存在しているのである。

まず彼女を特徴づけるその最たるところに、独特の色彩感覚による絵画性が存在する。近年、日本でもアウトサイダーアートが注目されるようになり、彼女の描写スタイルはそれそのものだという意見もある。一方、彼女は美術大学で専門的な美術教育を受け、デッサン重視の保守的な手法によって身動きが取れなくなったその時に、彼女は今のスタイルを見出したのも事実である。感覚そのものを直接的な色彩と情熱的な筆致に求めた彼女の表現は、むしろ後期印象派から展開したフォーヴィズムの流れに類似しているかのようである。そのような彼女の表現技法は、マイクロポップとは逸脱した絵画史の文脈に組み込まれる可能性を有すると強く感じる。

そして当展の主題である「STORY」。彼女の描くモチーフに欠かすことのできない「物語性」が、彼女の作品により深みを与える。全く時代も社会環境も異なるが、私は彼女の物語に20世紀アイルランド文学の巨匠ジェームス・ジョイスの文体を連想してしまう。実社会と空想の世界をユーモアが媒介して、両者を自由に行き来できる想像性豊かな世界。ジョイスもはまぐちも、文体の中に韻を踏んだりリズムミカルな言葉遊びを加えることによって、作品に触れた第三者が軽やかに、より自由な解釈を作り出させる仕組みを構築しているのである。

歴史との断絶を前提に、現在の現代美術が語られることの多い中で、はまぐちの作品群はもう一度美術を過去に繋げるべく要素をふんだんに含んでいると訴えたい。「マイクロポップ」を超える物語が、彼女の作品の分析によってどんどん公に出されるべきと思っているのは、私だけではないはずだ。